

南郷町文化財調査報告書第5集

崩野遺跡Ⅲ

第3次崩野遺跡に伴う概要報告書

2000.3

宮崎県南那珂郡南郷町教育委員会

南郷町文化財調査報告書第5集

崩野遺跡 III

第3次崩野遺跡に伴う概要報告書

2003

宮崎県南那珂郡南郷町教育委員会

序

この報告書は、土取り工事に伴い、平成8年4月から平成8年6月まで実施した第3次崩野遺跡の発掘調査の報告書です。崩野遺跡は縄文時代中・後期の遺跡で過去2回の発掘調査で1万点以上の遺物が発掘されました。今回の発掘調査でも多くの土器や石器が出土しており、南郷町の歴史を知る上で貴重な資料になると思います。

今後、歴史の研究や学校教育・生涯学習などの場で多くの人々に活用して頂き、埋蔵文化財への関心が高まり、文化財保護に対する理解を深めて頂けたら幸いです。

なお、この発掘調査にあたって多くの方々に御理解、御協力をいただきましたことに対し心から御礼申し上げます。

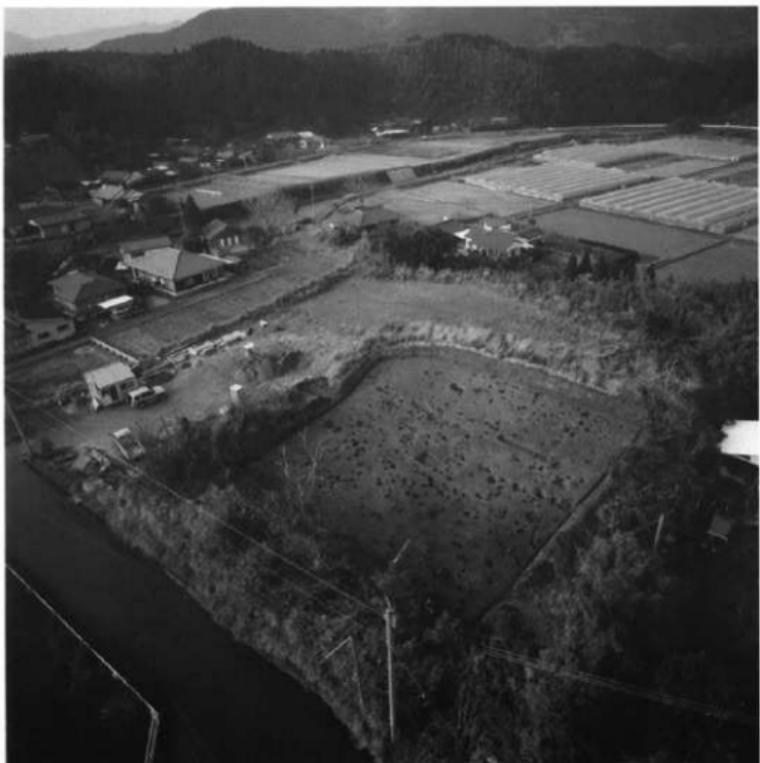
平成12年3月

南郷町教育委員会

教育長 中 武 達 夫

例　　言

1. 本書は平成8年度に南郷町教育委員会が実施した、土取り工事に伴う第3次崩野遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は（故）豊福 孝が行った。
3. 本書の執筆・編集・トレースは代田博文が行った。
4. 現地での実測・写真等の記録は豊福・和田・谷口・金丸が行った。
5. 遺構の略号は次のとおりである。
S C = 土坑
6. 層序の色調については「新版標準土色帳」を使用した。



崩野遺跡全景A



崩野遺跡全景B

本文目次

第1章 はじめに	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の組織	3
第2章 遺跡の位置と環境	8
第3章 調査の記録	15
1. 層序について	15
2. 遺構について	17
3. 遺物について	17
第4章 おわりに	23

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/5,000)	7
第2図 遺跡分布図	9
第3図 遺構分布図	16
第4図 カマド状遺構 (1)	18
第5図 カマド状遺構 (2)	19

第1章 はじめに

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

崩野遺跡は土取り工事に伴い、過去2回の発掘調査〔第1次調査 昭和62年3月～4月、第2次調査 平成元年12月4日～12月27日〕が行われ、縄文時代中・後期を中心とした遺物が約1万点以上出土した遺跡である。

今回、第2次調査区の東側に隣接する土地の土取り工事に伴い、平成8年4月より南郷町教育委員会が発掘調査を開始した。(平成8年6月調査終了)

2. 調査の組織

平成8年度の発掘調査

調査主体 南郷町教育委員会

教育長	神 恵 春 一
社会教育課長	深 田 金 好
文化係長	本 田 宏 二
庶務（主査）	竹 井 みふ子
調査担当（主査）	豊 福 孝（故）

平成11年度 概要報告書作成

南郷町教育委員会

教育長	中 武 達 夫
社会教育課長	深 田 金 好
文化係長	本 田 宏 二
庶務（主査）	竹 井 みふ子
編集担当（主事）	代 田 博 文

第2章 遺跡の位置と環境



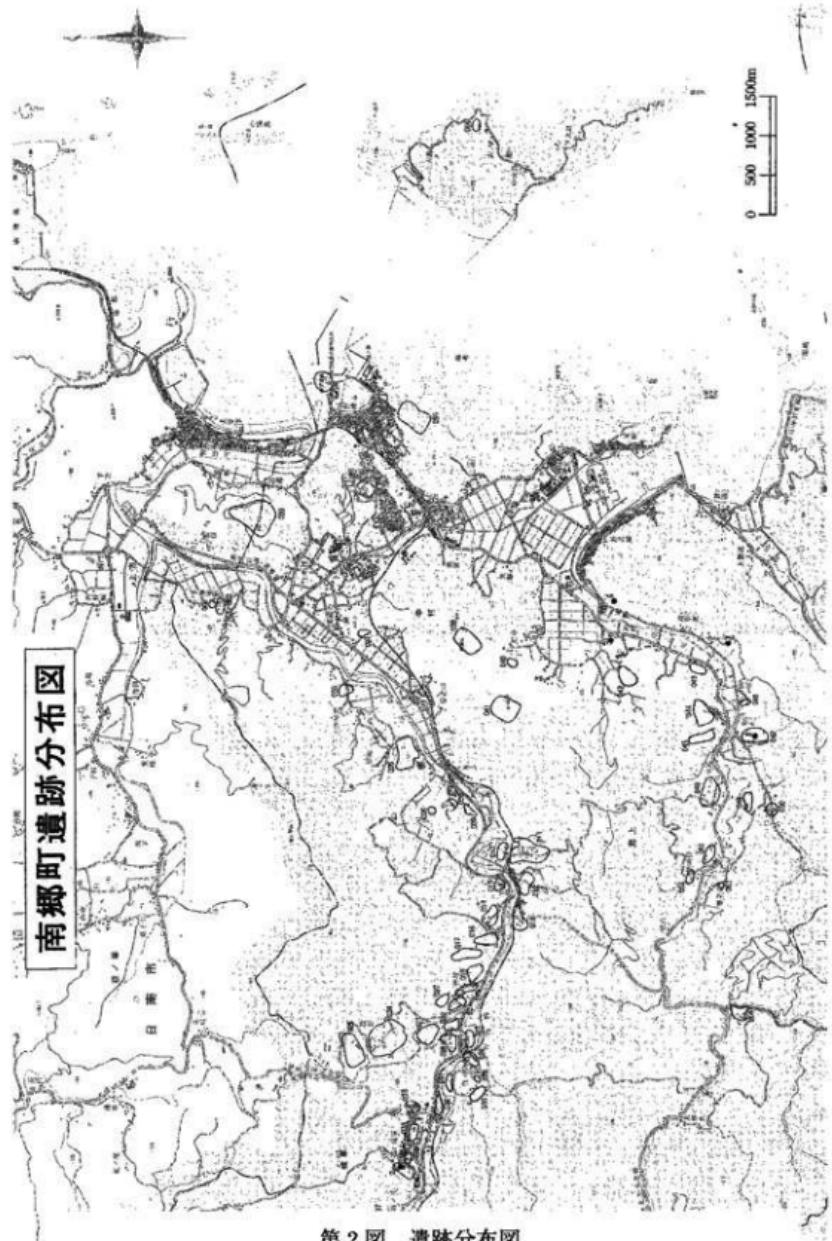
第1図 位置図 (1/5,000)

第2章 遺跡の位置と環境

崩野遺跡は宮崎県南那珂郡南郷町大字榎原字前原に所在し、そこは海から内陸へ約3km入った南郷町北部を西から東に流れる南郷川の中流右岸の標高22mのシラス台地で、第1次、第2次の発掘調査の調査区は西側舌状部に位置する。今回の調査区はほぼ同じ位置である。

調査区のすぐ南側には線路が通っており、それを挟んだ台地上に埋蔵文化財包蔵地である崩野第2遺跡があるが、もとは1つの台地で線路によって分断されたと考えられる。台地の北側には田畠が広がり、それを迂回するように南郷川が蛇行しながら西から東へ流れている。

周辺の遺跡では縄文時代早期の大谷後田遺跡と中ノ迫遺跡があり、大谷後田遺跡は崩野遺跡から北西約1.2km所在し、その南東約300mには中ノ迫遺跡が所在する。



第2図 遺跡分布図

埋 藏 文 化 財

遺跡番号	遺跡の名称	所 在 地	時 代	種 別	田番号	文 献	備 考
001	終 谷 遺跡	大字津屋野字 終 谷	弥 生 古 墓	散布地			
002	穴 山 遺跡	大字津屋野字 穴 山	弥 生	々			
003	津屋野 遺跡	大字津屋野字 原 田	繩 文	々	23-38		
004	光藏寺 遺跡	大字中村甲字 光藏寺	平 安	々			
005	地主原 遺跡	大字津屋野字 地主原	弥 生 中 世	々	23-37		
006	谷之口 遺跡	大字谷之口字 城之内	不 詳	々	23-36		
007	池ノ下 遺跡	大字谷之口字 池ノ下	弥 生	々			
008	下ノ園 遺跡	大字谷之口字 下ノ園	弥 生 中 世	々			
009	中河原 遺跡	大字谷之口字 中河原	繩 文	々			
010	崩野第1 遺跡	大字榎原丙字 前 原 下 鶴 下	繩 文	々			
011	崩野第2 遺跡	大字榎原丙字 前 原 池 之 穴	繩 文 弥 生	々			昭62、平元 発掘調査
012	西 下 遺跡	大字榎原丙字 開 下	繩 文	々			
013	提 下 遺跡	大字榎原丙字 堤 下	弥 生	々			
014	折生野 遺跡	大字榎原丙字 折生野	繩文 弥生 近 世	々			
015	入 角 遺跡	大字榎原丙字 入 角	近 世	々			
016	弓 田 遺跡	大字榎原丙字 弓 田	弥 生	々			
017	中ノ迫 遺跡	大字榎原丙字 中ノ迫	繩 文	々			
018	田尾原第1 遺跡	大字榎原乙字 田尾原	々	々			
019	田尾原第2 遺跡	大字榎原乙字 田尾原		々			
020	大谷後田遺跡	大字榎原乙字 大谷後田	繩 文	々			

遺跡番号	遺跡の名称	所 在 地	時 代	種 別	旧番号	文 献	備 考
021	田尾原第3遺跡	大字榎原乙字 田尾原	近世	散布地			
022	枇杷ノ首第1遺跡	大字榎原乙字枇杷ノ首	縄文	タ			
023	枇杷ノ首第2遺跡	大字榎原乙字枇杷ノ首	縄文	タ			
024	牧ノ原 遺跡	大字榎原乙字 牧ノ原	中世	タ			
025	永野原 遺跡	大字榎原乙字 永野原	縄文	タ			
026	川 烟 遺跡	大字榎原乙字 川烟原	縄文	タ	23-35		
027	田鶴第1遺跡	大字榎原乙字 田 鶴	縄文	タ			
028	田鶴第2遺跡	大字榎原乙字 田 鶴	縄文 弥生	タ			
029	野中谷第1遺跡	大字榎原乙字 野中谷	弥生	タ			
030	野中谷第2遺跡	大字榎原乙字 野中谷		タ			
031	追 田 遺跡	大字榎原甲字 追 田	弥生	タ			
032	原 下 遺跡	大字榎原甲字 原 下	縄文	タ			
033	榎原下 遺跡	大字榎原甲字 榎原下	弥生	タ			
034	榎原二 遺跡	大字榎原甲字 原 二 榎原下	縄文	タ			
035	大追第1遺跡	大字榎原甲字 大 追	タ	タ			
036	大追第2遺跡	大字榎原甲字 大 追	弥生	タ			
037	石之元 遺跡	大字榎原甲字 石之元	縄文	タ			
038	南郷城 跡	大字中村甲字 城 山	中世	城館跡	23-30		
039	陣 之 城 跡	大字谷之口字 陣之谷高瀬 谷之瀬袋ヶ瀬戸	中世	タ			
040	並 松 遺跡	大字脇本字 並 松	弥生	散布地			
041	湖雲ヶ城 跡	大字脇本字 陣之城 岡追作畠助九郎	中世	城館跡			別称 岡の城址

遺跡番号	遺跡の名称	所 在 地	時 代	種 別	旧番号	文 献	備 考
042	和田城跡	大字渴上字 和田城	中世	城館跡			
043	小久保手遺跡	大字渴上字 上ノ久保 小政井手	繩文	散布地			
044	大久保 遺跡	大字渴上字 宮原 大久保下	繩文 弥生	タ	23-42 43		
045	大玉ノ尾遺跡	大字渴上字 大玉ノ尾	平安	タ			
046	後谷 遺跡	大字渴上字 後谷	繩文 弥生	タ			
047	別府 遺跡	大字渴上字 井ノ尻 別府	平安	タ			
048	大追 遺跡	大字渴上字 山影 栗原 大追	弥生	タ	23-41		
049	笠原 遺跡	大字渴上字 笠原	弥生	タ			
050	中鶴 遺跡	大字渴上字 錦ヶ谷 中鶴	弥生 近世	タ			
051	小川口 遺跡	大字渴上字 内田 小川田	弥生	タ			
052	丸畠 遺跡	大字渴上字 丸畠	弥生	タ			
053	秋山窯 遺跡	大字渴上字 神原 野平	(不詳)	窯跡	23-40		
054	筆之久保遺跡	大字渴上字 筆之久保	繩文	散布地			
055	目井城跡	大字中村乙字 山之口	中世	城館跡	23-48		
056	大島 遺跡	大字中村乙字 鼠尻	(不詳)	散布地	23-49		

第3章 調査の記録

第3章 調査の記録

1. 層序について

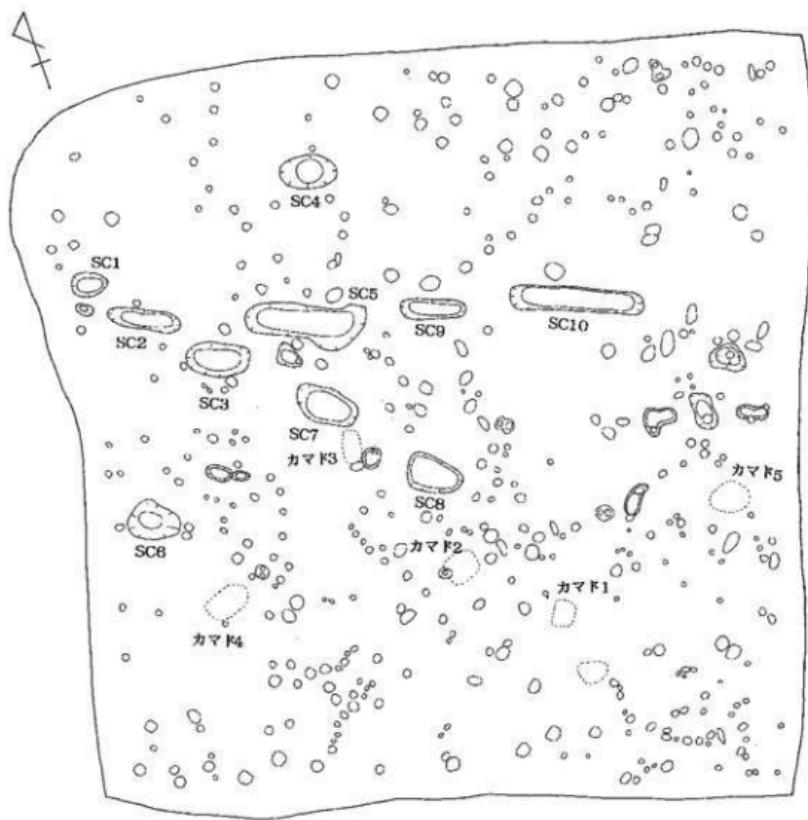
今回の調査区の層序は以下のとおりである。

崩野遺跡の基本層序

		調査区東断面
I		
II		I 表土
		II 暗褐色粘質土 (Hue10YR 3 / 4)
III		III 黄褐色粘質土 (Hue10YR 5 / 6) アカホヤ粒 (1 cm大) が混ざる。
IV		IV 浅 黄 色 土 (Hue 5 Y 7 / 3) [シラス] アカホヤ粒 (1 cm大) が上部に混ざる。

第1次、第2次調査の際は、アカホヤ火山灰層が残っていたが、今回の調査では見られなかった。調査区が北東方向へ傾斜しているので、流れたものと考えられる。

遺物は第Ⅱ層から多く出土しており、遺構も第Ⅱ下層から第Ⅲ上層にかけて検出されている。



0 5 10m

第3図 遺構分布図 (1/762)

2. 遺構について

今回の調査で柱穴が約400基、土坑が10基、カマド状遺構が5基検出された。

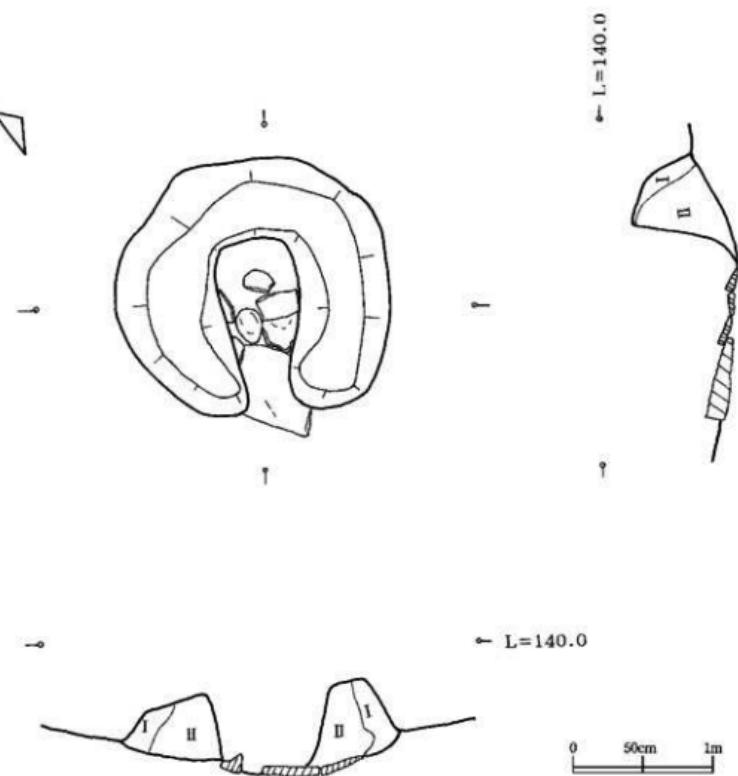
柱穴については陶磁器片等が出土しているので、時代は中世から近世と考えられるがその数が多く、また資料の不足により、そのプランを見つけることができなかった。

土坑については出土遺物がなく特定はできないが、第2次調査で検出された近世墓とおなじ形状を呈し、寛永通宝も1枚出土しているので近世墓の可能性が考えられる。

カマド状遺構はうち3基は完全に破壊され、2基が上部を削られているが形状を留めている。カマド状遺構（1）（2）[第4・5図]両者とも焼土化した炉壁が馬蹄形を呈し、中央のくぼみには30~40cm大の偏平な石を配している。石の下は焼土と炭化物の混じった土となっている。これは福岡市の博多遺跡で検出された鍛冶炉跡と形状が類似しており、また、文献等の記録はないが、調査区周辺に江戸時代に鍛冶屋があったとの伝承があり、今回の調査でも鐵滓が出土しており、鍛冶炉跡の可能性が高いと考えられる。

3. 遺物について

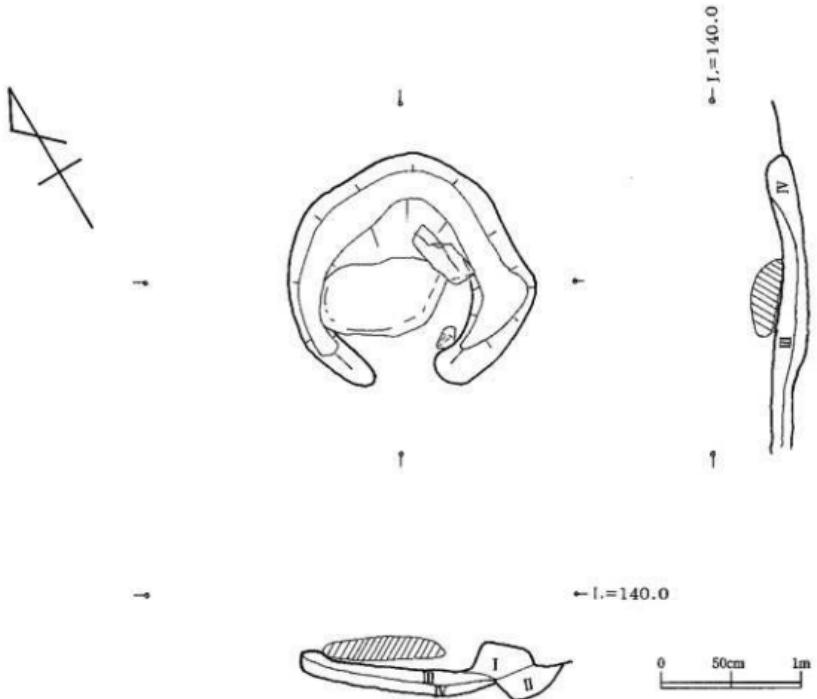
今回の調査で約10,000点もの遺物が出土したが、なかでも縄文土器の数が多く、第1次、第2次調査と同じく、阿高式系などの沈線文や凹線文系土器や市来式系の貝殻文系土器が多数見られる。また、今回出土した遺物で第1次、第2次調査の出土遺物と接合できるものがあり、3回の調査を全部まとめた整理作業が必要である。



第4図 カマド状遺構 1

I Hue2.5YR 5/8 明赤褐色 焼土

II Hue10YR 3/3 明褐色 炭化物含



第5図 カマド状遺構 2

- I Hue10YR 5/2 灰黄褐色 炭化物含
- II Hue10YR 4/2 灰黄褐色 粘質
- III Hue10YR 3/2 黒褐色 炭化
- IV Hue5YR 5/8 明赤褐色 焼土

第4章 おわりに

第4章 おわりに

今回の調査は平成8年度に行われたが調査資料等が少なく、十分な報告ができなかった。

また、遺物の考察については遺物の量があまりにも多く、また、第1次、第2次調査で出土した遺物と接合するものもあるため、今回の報告書作成期間ではまとめてきれず掲載できなかった。筆者の力量不足の感に堪えなく、深くおわび申し上げる次第である。今後、整理作業並びに考察がまとまり次第、報告したいと思う。

〔参考文献〕

1. 南郷町教育委員会「南郷町遺跡詳細分布調査報告書」
「南郷町文化財調査報告書第1集」1990
2. 南郷町教育委員会「崩野遺跡」 「南郷町文化財調査報告書第2集」1990
3. 南郷町教育委員会「崩野遺跡Ⅱ」 「南郷町文化財調査報告書第3集」1991
4. 福岡市教育委員会「博多41」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第370集」1994

図 版

●遺 構

●遺 物



カマド状遺構 1



カマド状遺構 2



出土遺物 1



出土遺物 2



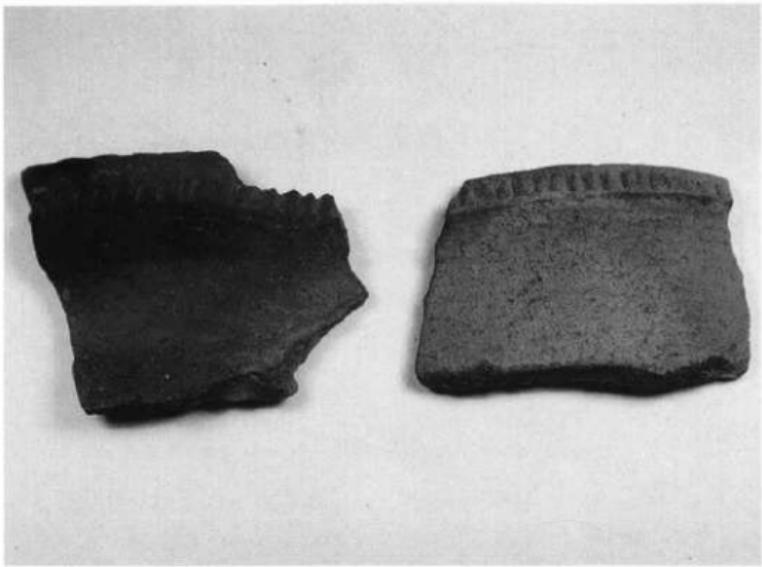
出土遺物 3



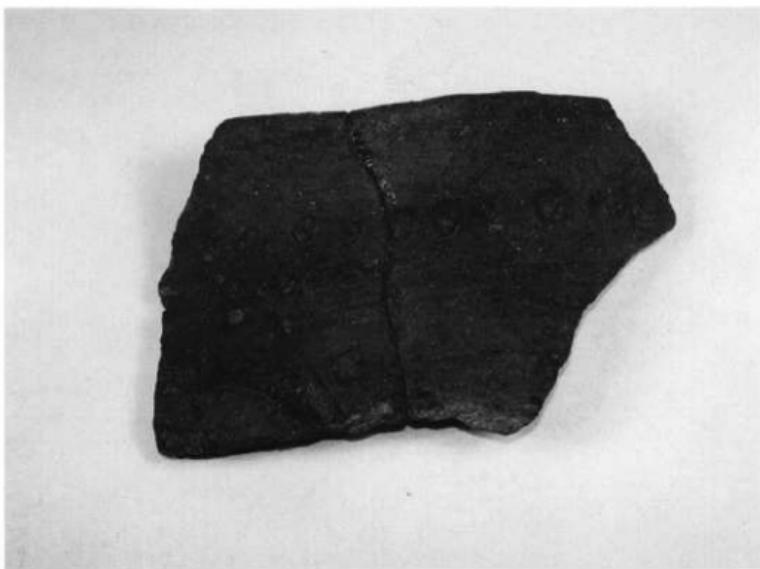
出土遺物 4



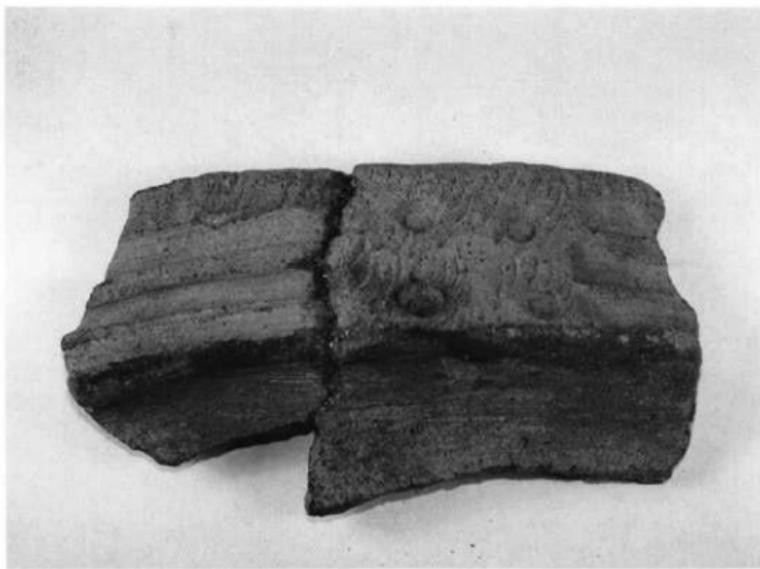
出土遺物 5



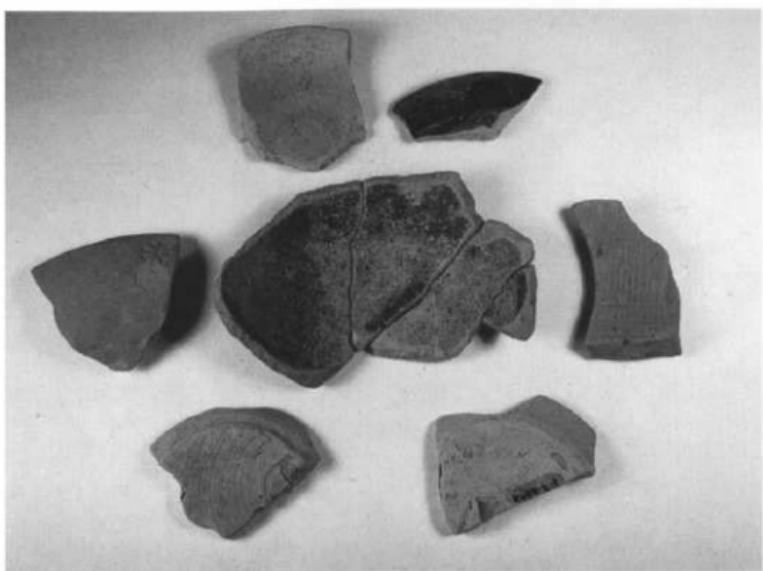
出土遺物 6



出土遺物 7



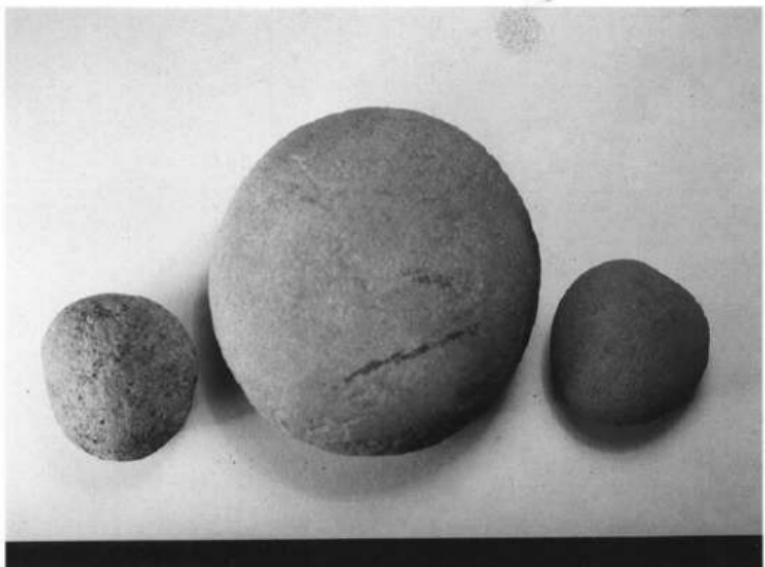
出土遺物 8



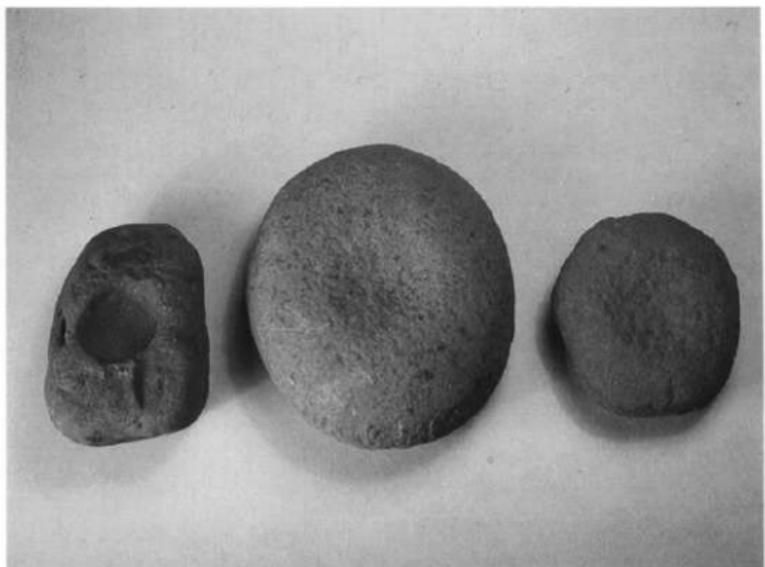
出土遺物 9



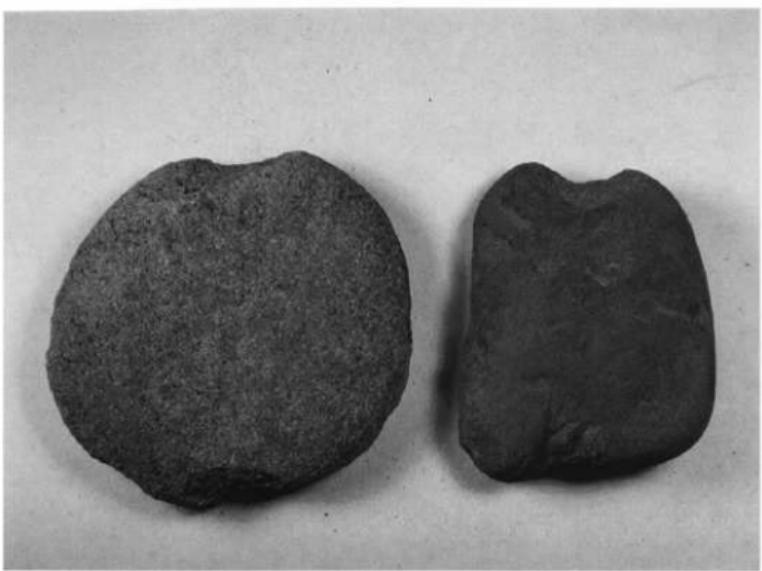
出土遺物 10



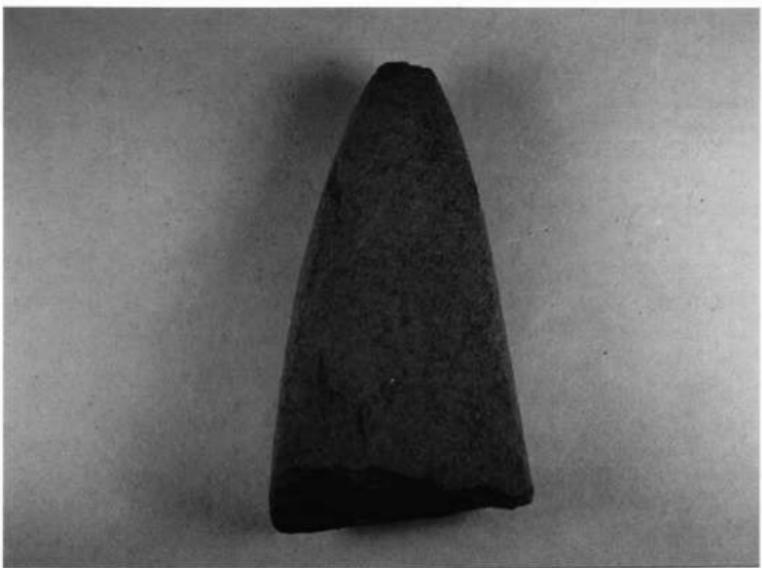
出土遺物11



出土遺物12



出土遺物13



出土遺物14

南郷町文化財調査報告書 第5集

平成12年3月31日

編集・発行

宮崎県南郷町教育委員会

南那珂郡南郷町大字中村乙7051番地25

印 刷

宮崎南印刷

